

## C-13 モアレ法による頸部形態把握の試み

お茶の水女大家政 柳沢澄子・延原広美・猪又美栄子  
杏林大医 〇 芦沢玖美

目的及び方法：従来の二次元的な計測方法によらず、より立体的に頸部形態を把握することは、衣服の衿つけの問題とも関連して重要である。その試みとして、われわれは男子石膏像1体の頸部を格子投影法によってモアレ撮影した。通常の撮影の他に投影後基準格子回転角 $\pm 15^\circ$ をつけた撮影を行い、ネック・ポイントを中心としてその上下2.1 cm幅の間で10の切断面(32° 00' 傾斜)を描いた。各断面の前後径、左右径および面積を測定した。

結果：

- 1) 下位断面は後方が扁平な三角形に近く、上位断面は円に近い。
- 2) 前後径は下位断面(とくに nos. 1・2)で大きい。その他の断面では位置による明確な傾向は認められない。
- 3) 一般に横径は上位断面に向うほど小さくなる。
- 4) ネック・ポイントとノドボトケ下端を通る断面(mo. 5)は前後径、左右径ともにその上下の断面より小さい。
- 5) 頸の最大横径を示す点を上下に結んだ線は、側面からみて上端が前方に傾斜している。
- 6) 断面積は一般に下位レベルほど大きい。後方において頸から頭への移行部と考えられる上位レベル(nos. 9・10)で再び大きくなる傾向が認められる。